

野沢 尚

Nozawa Hisashi

リミット

[Limit]

リット・ Limit

野沢 尚

Nozawa Hisashi

野沢 尚(のざわ・ひさし)

一九六〇年、愛知県生まれ。日本大学芸術学部卒。八五年、テレビドラマ「殺して、あなた」、映画「Vマドンナ大戦争」で脚本家デビュー。その後、映画「その男、凶暴につき」、ドラマ「青い鳥」など、多くのヒット作を手がける。九七年、『破線のマリス』で第四十三回江戸川乱歩賞を受賞。

N D.C 913 424p 20cm

リミット

一九九八年六月三〇日 第一刷発行

著者 野沢 尚のざわ ひさし

発行者 野間佐和子

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二―二―二／郵便番号一三三―八〇三
電話 (〇三) 五三九五―三五〇五 (編集部)

(〇三) 五三九五―三六二二 (販売部)

印刷所 慶昌堂印刷株式会社
製本所 黒柳製本株式会社



定価はカバーに表示してあります。

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。
送料小社負担にてお取替えいたします。なお、この本についてのお問い合わせは文芸局文芸図書第一出版部あて
にお願いいたします。本書の無断複製(コピー)は著作権
法上の例外を除き、禁じられています。

©Hisashi Nozawa 1998, Printed in Japan

¥1800-

ISBN4-06-209229-8

(文2)

リ
ミ
ツ
ト

装 装
幀 画

多 西
田 口
和 司
博 郎

荒川から川口市元郷もとごうの路地へと吹き抜ける風が、少年の鼻孔びこうに清涼さつきな五月晴れの匂いを運んできた。

ゴールデン・ウィークが明けたばかりの水曜日、宅間均史たくま ひとしは給食を挟んだ五時間目の体育を終えて家路についた。校章入りの黄色い通学帽子、まだ革の艶つやを失っていない真新しいランドセル、トレナーのエンブレムとズック靴の甲には同じアニメのキャラクターが載っている。

整列の時の「前へならえ」では両手を腰に当てるクラス一のチビ助だ。給食のスープが水で薄められていたのは、クラスの長身グループのいじめだった。そこで泣き寝入りをしてスープを残すようなひ弱な七歳でないと、宅間均史の不幸があるのかもしれない。連中の薄笑いを見るなり頭に血がのぼって、給食中の教室を突っ切り、いじめのリーダー格に飛びかかっていった。

鼻に齒形をつけてやった。そいつの泣き声が聞けたのは愉快だった。いじめグループによる十

倍の報復がやってくる前に、駆けつけた担任教師の制止によって騒乱は治まった。

来週の運動会の練習に充てられた体育の授業でも、敵の動きは不気味だった。屈強な体育教師の目の前では手を出すことはなく、徒競走の列の向こうから舌なめずりの表情を投げかけていた。

この下校時、学校から自宅までの道のりで奴らの襲撃がないこと自体が不思議で、桜の新緑が南風にさやぐほかは、嵐の前の静けさに思える。明日は自分の血を見るに違いない、と宅間均史は子供心に覚悟していた。

工務店を経営している父親は、以前三人いた職人を一人にリストラし、女事務員にも辞めてもらって母親をデスクに座らせた。共働きの家の一人っ子。帰宅しても友人はセガ・サターンしかない。今日のようにひと悶着があつたあとではチビ組の友人たちはふりかかる火の粉を恐れて、遊びにくることもないだろう。両親が帰ってくるまで、宅間均史は格闘ゲームの一人プレイで時間を潰すしかない。

神社の脇を抜けると道が細くなり、蛇が地をのたうつような路地が続く元郷の住宅街には、住人の気配すら感じられない。午後二時半、どこからかワイドショーのテレビ音声が聞こえてくるだけの、重く煮詰まつたような静寂。いつも通る道なのに、油断をしていると迷子になりそうな心細さを感じた。

すると不意に泣きなくなつた。寂しいし、明日が怖い。

幅六メートルの公道を横断すると、宅間均史には憩いの路地が待っている。畳屋の山崎さんが「よお坊主」と声をかけてくれて、麦茶と草加煎餅のおやつを分けてくれる。そこでの十五分ほどの道草が宅間均史に、家での孤独に立ち向かう活力を与えてくれる。

路地の向こうに見えた畳屋の山崎さんは今日も五分刈りの頭から汗をしたたらせ、太い畳針を渾身の力で突き刺している。作業着から伸びる上腕が見事な力瘤を作っていてはれぼれる。威張り散らすだけの父親と比べると、あれこそ男だよな、と思うが、父親は山崎さんについて、酒乱のせいで女房子供が家を出ていつてからというものの仕事に自分を駆り立てることでは生きられない男だと言っていた。言葉の半分も宅間均史は理解できなかった。

山崎さんはやがて宅間均史に気づいて、「よお坊主、一杯どうだ」と麦茶のプラスチック・ボトルを掲げてくれるだろう。

視界が白く急激に遮られた。公道の右側からやってきた白いワゴン車が行く手を塞いだ。目の前でドアが荒々しく横に開き、暗がりの車内から二本の触手が伸びてきた。

畳職人の山崎徳郎は、仕事場の軒先の日蔭から日向へと振り返り、陽光の眩しさに目をそばめた。路地の彼方に黄色い学童帽が見えたと思った一瞬ののち、少年の目印は視界からかき消えた。公道に出現した白いワゴン車は、窓に黒いシールを貼っていて、内部はさだかでなかった。時間にして三秒ほどか。すぐに発進したワゴン車が走り去ると、学童帽の色はそこにはなかった。

あの年頃の子供を見ていると、山崎徳郎は去っていった息子を思いだしてしまう。それでも宅間均史少年との毎日十五分の語らいが、酒びたりの日々を送る山崎にとって救いになっていた。車がこちらの視界を塞いでいる時に少年は公道を曲がっていったのだろうと思ひ、山崎は仕事に戻った。

なぜあの時、連れ去られる宅間均史に気づかなかったのかと、山崎の悔恨は終生続くことにな

る。

七歳男児。身長百八センチ。体重十八・四キログラム。血液型O型。

HLA型——「A9・B7・DR1/A2・B15」

腎機能、肝機能、共に異常なし。心臓百十九グラム。肺臓三百五十グラム。腎臓百八グラム。肝臓六百六十グラム。



ゴールデン・ウィークが明けたばかりだというのに、福島真美の母親はパチンコに明け暮れていた。

数字の7が三つ並ぶと救急車のような赤いランプが回りだし、店員が箱を持って駆けつけ、周囲の客が振り返る。あの時がたまらない、自分がスターになった感じがする、と母親は言う。今日の様子だと、スターになるまではほど遠い。

福島真美は今日もパチンコ屋のロビーを遊び場にするしかない。白いブラウスにギンガムチェックのスカート。腰まで伸びる長い髪は、朝、簡単にブラッシングしただけ。四歳の娘の髪をおさげに結う時間も惜しかったのか、母親は真美を自転車のうしろに乗せ、開店時間が迫るパチンコ店に駆けつけた。

埼玉県入間市。国道16号線沿いの、一見するとデイズニールランドのシンデレラ城を思わせる瀟洒な外観の店だった。しかし中に入っても王子様やお姫様が真美と遊んでくれるわけではない。そこには耳を聳する電子音と煙草の煙しかない。

私の目の届く所にいなさい、と真美は母親にきつく言われている。通路の先に母親のでつぶりした体が見える位置、ロビーのソファに座って折り紙をはじめて、もう一時間になる。

父親は外車のセールスマンだ。連休も仕事にでいて、母親は不満たらたらでパチンコ通いである。真美の不満のはけ口はどこにもない。稼いだ金で母親が着せ替え人形を買ってくれた時は少し嬉しかったが、ゴールデン・ウィークの七連休を人形ひとつで楽しく過ごすことはできなかった。

おしっこをしたあとに横腹が痛くなると連休中に訴えたら、病院が始まったら検査にいこうと母親は言った。しかしすっかり忘れている。「痛い、痛い」と連発すればかまってくれるかもしれないと思って、大袈裟に痛がったのがよくなかったのかもしれない。この頃、真美は母親に狼少年のように思われていた。

約束の一時間だよ、次はあたしと遊んでよ。真美は通路の先の母親に駆け寄って声をかけてみようかと思ったが、あの顔つきでは駄目だと思った。あとひとつの7に飢えた目。うっかり声をかけて母親の集中が途切れたら、7が呼べないのは娘が邪魔したからだと言わんばかりの顔になる。

もうひとつ「奴さん」を折ってからにしよう、と真美は思った。

「一人で寂しいね」

横から声がした。振り向くと、黒いキャップを目深にかぶった若い女がいた。顔の上半分がひさしに隠れて見えないが、その奥でふたつの瞳が濡れたように光っている。吹き出物ひとつないスベスベした頬が柔らかな笑顔を作っている。ナイキのジャージの上下。近所の人だろうか、と真美は思った。

ママよりずっと若くて、ずっと綺麗な人だ。こんな時間にパチンコをしている若い女なんて口くなんじゃない、と母親は言うだろう。いつか隣の台で若い茶髪ちやばつの女が7を三つ並べて狂喜した。いっぺんに不機嫌になった母親が真美にそう言ったのだ。

「折り紙、好きなの？」

「うん」

「鶴は折れる？」

「ママに教わったんだけど、むずかしくて」

この女の人は、パチンコ屋に来たのにどうしてパチンコをしないのだろう、と真美は思う。台はたくさん空いているのに。

「外で遊べばいいのに」

「遠くにいっちゃ駄目だって、ママが……」

「ガラスの向こうだもん。大丈夫かもよ」

この女の人が遊んでくれるんだろうか。真美の頭の中で十個ほどの遊びがすぐ思い浮かんだ。

「これ知ってる？」若い女がジャージのポケットから、びよーん、と取り出した物を見て、真美の顔が輝いた。

「知ってる！ ゴム飛びのゴム」

「しよっか」

「でも……」

「大丈夫だって」

真美はジャージ姿の女に手を引かれ、自動ドアをくぐって駐車場に出た。爽さわやかな五月の風が

うな^なじを撫^なで、いっぺんに足どりが軽くなった。

地元の高校を出てこのパチンコ・チェーンに就職した店員・井原昭彦^{いはらあきひこ}が、福島真美失踪当時の目撃者だった。

いつも母親に連れられて、開店時間にやってくる子供なので顔はよく知っていた。行儀よくソファで折り紙をしている女の子。店の置物のように見えるほどだ。客の苦情で玉の交換機を調整していた時、いつもの居場所に女の子がいな^いいに気づいた。

目を転じると、ガラスの向こうで見慣れない白いワゴン車がサイドのドアを閉め、駐車場から滑りでていくところだった。ドアが閉まる瞬間に、ギンガムチェック柄が見えた気がした。

母親はいつもの台で奮闘中だった。「娘さんはトイレですか？」と声をかけたほうがよいかもしれないと思った時、交換機の内部で変なレバーを動かしてしまったのか、玉が次々と床にこぼれ落ちた。客が「あーあ」と声をあげ、床に散乱した玉と一緒に拾ってくれる。そんな騒ぎにかまけて、福島真美の不在を母親に告げなければなら^ないことなど、すっかり念頭から消えていた。

あの時母親に教えていたら、と井原は後に悔やむことになった。

四歳女兒。身長九十七センチ。体重十三・八キログラム。血液型A型。

HLA型——「A2・B18・DR1/A11・B40・DR2」

腎機能にやや異常が見られる。先天的な腎臓障害の疑いがあり。

連休明けの最初の土曜日だが、東京近郊のワンダーランドは午後に向かって気温が高くなるに従って、人口密度も高くなっていた。

人気のアトラクションは一時間待ちの看板を掲げている。キャラクターのかぶりものに幼児が駆け寄り、親が向けるカメラにはちきれんばかりの笑顔を投げかけている。かつては海だった埋立地にこの巨大遊園地が建設されて、もう十年以上になる。一日では遊びきれない娯楽施設の豊富さで多くの入場者がリピーターとなり、人気の衰えを見せない。

五歳になったばかりの古賀直樹は両親に手を引かれて横浜からやってきた。ワンダーランドのフリークのような母親には何度か連れてきてもらったが、家族三人で来るのは初めてだ。出版社に勤めている父親が仕事で連休を返上した罪滅ぼしに、近くのホテルに一泊して二日ばかりで遊んでくれることになったのだ。が、父親は二日酔いがとれないらしい。母親がキャラクター・ショップでワンダーランド名物のクッキーを買いこんでいる間、ベンチの日蔭で寝転んでいる。

「ねえ、これ買って」

直樹はクッキー選びに余念のない母親の袖そでを引っばって、ゴム製のグッズを差しだす。様々な形に変えられるカスピ海の怪獣だ。去年のアニメ映画で人気を博したキャラクターがキーホルダーになっている。

「これで買える？ お釣りをちゃんともらうのよ」と母親が千円札を渡す。

レジで会計をしてもらってひと足先にショップをでると、ベンチの父親に駆け寄り、直樹はキーホルダーを自慢げに見せた。

「写真、撮ってやるよ」

父親は眠たそうな目をこすって起きあがった。直樹はキーホルダーの怪獣の顔がカメラに向くように掲げ、路上に仁王立ちになる。

父親は縦の構図でカメラを構えた。直樹はカスピ海の手賊役を真似して、ピストルの形にした右手を、左手で持った怪獣の顔に突きつける。シャッターが切られると、直樹は股間こかんを手で押さえて「おしっこ」と言った。今にも洩れそうでもじもじと足踏みする。

「早く行ってこい。行けるだろ一人で。あの青いマークだ」

シヨップの先に男子トイレのマークが出ている。いちいちトイレにまで付き添ってもらわなければならない年頃ではない。

「なくすぞ、キーホルダーをちゃんとポケットに入れておけ！」

父親——古賀英寿ひでとしは走っていく息子に声をかけた。直樹は走りながら振り返り、「はい」と応えてトイレの入口に吸いこまれた。

トイレの中は外の人込みが嘘のように閑散かんさんとしていた。用を足した中学生が出ていくと、直樹だけになった。

ちよろちよろと便器に落ちる音がやけにタイルに響き渡る。カスピ海の怪獣は半ズボンのポケットから顔だけ出している。おしっこを絞りだしている小さなペニスを間近で眺めている恰好だ。

誰かがトイレに入ってきて、背後を通り過ぎて個室に入った。直樹が最後の一滴を絞りだしてズボンのチャックを閉じようとした時だった。

うしろで個室のドアが開いて、音もなく躍りおどかかってきた何者かが直樹を拘束した。声をだす

暇もなく、直樹は両腕に抱きかかえられ個室に引きずりこまれる。叫ぼうとしたが、声が喉元までせり上がってくるより早く、濡れた布が口と鼻に当てられる。ハッカの刺激臭がしたと思った直後、直樹の視界は白い闇へと吸いこまれていった。

顔が見えた。金髪の若い男。渋谷のセンター街で見たことのある風体。ロッカー。フリーター。チーマー。そういうカタカナの呼び名。白濁する視界に思考力も溶けていく。直樹は強制的な眠りにがんじがらめにされた。

それは遊び疲れた子供を若い父親が抱いている姿としか見えなかった。

古賀英寿がそろそろ息子がトイレから出てきはしないかと入口のほうへ視線を泳がせた時、七三の髪型の若い父親がスワローズ・ファンの子供を抱いて出てきた。息子と同じ年頃だが服装が違ふ。それだけで古賀英寿は氣にとめず、視界の外に親子連れを押しやった。

古賀英寿から最後の頭痛が遠のいた。これで家族とともにアトラクションの一時間待ちにも耐えられる。ふたたびトイレの出入口を見る。直樹は「おしっこ」と言っていた。それにしては遅い。慌てて半ズボンを濡らしてしまい、その処理に困っているのだろうか。

シヨップからクツキーの入った袋を下げて妻が出てきた。「あれ、直樹は？」と問い掛ける眼差し。

古賀英寿は立ちあがった。息子の消えた方角へ足早に歩を進める。トイレへと接近するにつれ、胃の上部がちくちくと痛みだす。

見渡す限りの五月晴れに雷鳴を聞いたような忌まわしい感覚が、古賀英寿の身を焦がし始めていた。

午後の早い時間帯で、まだまだワンダーランドは人を飲みこもうとしていた。その人波に逆らうようにして、直樹を抱いた偽いつはりの父親は足早にエントランスを抜け、駐車場に止めてある白いハイエースを目指す。

男の手際は早かった。トイレで薬を嗅かがせると、ぐったりした直樹を洋式便器に座らせ、ポロシャツと半ズボンを脱がせ、バック・バックから別の服を取りだして着せた。ネイビーブルーの上半身は白いトレーナーにとって替わり、スワローズの帽子をかぶせると、外見上は別の子供になる。

次に取り出したのは、七三に分けられた大人用のかつらだ。男は自分の金髪にそれをかぶった。真っ赤なブルゾンを脱いで裏返す。リバーシブルの上着によって黒い上半身に変わり、うざん臭い横文字の人種からまっとうな市民の姿となった。

直樹から脱がせた服を袋にしまう時、トイレの床にそれが落ちた。カスピ海の怪物が男を睨みつけた。その面構えに男はふふつと笑い、自分のポケットにしまった。

直樹を抱き上げ、顔が肩口に埋まるような恰好で「だっこ」し、外の気配に用心しながら個室を出る時、中年太りの男が入口からやってきて鉢はちま合わせになってぎくりとなったが、この子の父親ではなかった。

足早に園内を通り抜けて、駐車場に辿りついた。

直樹をハイエースの助手席に座らせ、エンジンをかけて発進しようとした時だ。パーキング係の若い女がいきなり目の前に現われ、急ブレーキを踏んだ。その拍子に直樹の頭がぐりと前に傾いた。男は慌てて直樹の上半身をシートに安定させたが、若いパーキング係はこちらを注視し

ている。助手席の子供が何やらおかしい、そう感じたかもしれない。

男は「くそっ」と低く呟いて慌てた。誘導棒を持って出口へ案内しようとするパーキング係の横を、タイヤを鳴らして走り去った。直樹の頭がまた傾き、横の窓にゴツンと当たった。ミラーを見ると、パーキング係が突っ立ったままこちらを見送っている。

ナンバーを覚えられただろうか、男は不安になった。

五歳男児。身長百五センチ。体重十六・五キログラム。血液型RhマイナスAB型。

HLA型——「Aw36・B16・DRw6/A1・B27・DR4」

腎機能、肝機能、共に異常なし。心臓百三グラム。肺臓三百二十五グラム。腎臓百三グラム。

肝臓六百十八グラム。

希少価値。

2

営団有楽町線水川台^{ひかわだい}の地下鉄構内から地上に出てくると、有働公子^{うどうきみこ}のうなじに熱波がまとわりついた。つい三十分前に桜田門で感じた外気は初秋の気配があったというのに、九月はじめの陽気というのはまったく油断ならない。

公子は駅を目指す通勤通学の人々に幾度かぶつかりそうになりながら、青信号が点滅する横断歩道を足早に渡る。午前八時を過ぎた。急げば、登校する息子の貴之^{たかゆき}と会えるかもしれない。徹夜明けだった。事件は未明に解決したが、朝一番に提出する調書に手間取った。威力業務妨